

歩したのは腸の手術、第二次世界大戦では胸部手術、朝鮮戦争では血管手術、ヴェトナム戦争では外傷患者の緊急輸送が進歩したとパレの章に記している。

ラエネットとゼンメルワイスの章では余り他書では記していないエピソードが盛り込まれている。

ヨーロッパの医学が新大陸のアメリカに定着進歩を遂げた経緯については、ジョンズ・ホプキンス大学を例にとり、ハルステッドとタウシグに焦点をあて物語っている。女性小児心臓病学者としてのヘレン・タウシグの青色児の手術は輝かしい二十世紀医学の勝利であった。青色児を救うための人工動脈管を造ることは彼女の独創的アイデアであった。女医の理想とも言えるタウシグは一九五九年ジョンズ・ホプキンスの小児科教授となったが、八十八歳の誕生日の三日前に交通事故で亡くなった。

W・オスラーについては特別な章を設けていないが、本書の諸所に彼の思想、人生像が紹介されている。

終章は「臓器移植の話」で結ばれている。バーナード博士がケープタウンで人類最初の心臓移植を果たしたのは一九六七年であった。初期の心臓移植は死亡率が高かった。本書の書かれた時点で、手術しなければ望みがなかった移植患者の七五パーセントが術後一年間、六五パーセントが三年間生存し、この数字は更に向上するであろうとしている。この好成績の原因は免疫抑制剤シクロスポリンの発見やステロイド、抗生物質の併用による結果である。まさに臓器移植史こそは

過去の学問でなく将来への展望と考えられる。

著者ヌーランドは病気の原因が単純な原因、たとえば細菌によると考えれば、これを発見し取り除けば良い。事実細菌病原説は百年間医学研究のモデルを担ってきた。現代医学の進歩もほとんどこれにもとづいている。しかし臓器移植は違う。傷ついて役に立たなくなった臓器を取り除き丈夫な臓器を入れ替えれば良い。これは大昔の解剖中心的思考と一致し、経済的な還元主義にほかならないという。また臓器移植は倫理、宗教、社会、経済、その他の諸問題を包含している。本書は医学とは何か、その医学の歴史を探究する学問とは何かという疑問を投げかけているように思われる。

(大滝 紀雄)

〔河出書房新社、東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二、電話〇三―三四〇四―八六一、定価各巻三六〇〇円〕

新村拓著『ホスピスと老人介護の歴史』

本書の著者である新村拓氏は本書の他に『日本医療社会史の研究』、『死と病と看護の社会史』および『老いと看取りの社会史』をすでに刊行しておられる。この中であとの二冊と本書は現在わが国でもっとも重要な問題となっている老人の病・死・看護の一連のテーマを角度を変えて歴史的に社会的に分析したものである。とくに本書はホスピスおよび老人介護を中心として述べている。

本書の構成をみると三部から成り立つており、第一部は四章に分けられ、わが国におけるホスピスの思想と歴史について述べている。第一章、三において近世後期の浄土宗の僧侶法洲が著わした『臨終用心講説』にみられる死の作法を解説し、第二章において来日宣教師の医療伝道、とくに近世のキリシタンの間で行われた死の作法およびホスピス・ケアを紹介している。第二部も四章に分けられ、日本の中世から近世という時代において、老人をどのように観、どのように介護してきたかを、中世の御伽草子や謡曲、近世の医書を通して精力的に検討している。第三部は三章に分けられ、在宅医療のあり方を歴史的に概観すると同時に臓器移植の問題点を歴史的な立場から分析している。

筆者はかねがね医史学がさらに発展するためには、自分の行った研究対象が社会的にどのように評価され、社会的にいかなる影響を及ぼしたかというような社会との関連を深く分析した研究がさらに行わなければならないと力説している。で、新村拓氏の出版されたいくつかの著書は正に筆者が期待しているものであった。さらに著者は医師ではない。文学部出身である。したがって本書を読むとさすがに文学部出身者の執筆になる書物であるわいと納得できる手法で分析しておられる箇所が随所にみられ、今後の研究に大いに参考になった。

また著者はクリスチャンである。これが本書で述べられている来日宣教師の医療伝道をはじめ、随所にキリスト教と関

係ある記載がなされていることと密接な関連のあることはいうまでもない。筆者は『死と病と看護の社会史』を通読した時、仏教を客観的に的確に把握しておられるのに敬服した。われわれは良いにつけ悪いにつけ仏教の中にどっぷりひたっている。で、日本の仏教を正しく評価することは苦手であるが、それは著者がクリスチャンであることをあとがきで知って納得できた。そして著者は『死と病と看護の社会史』の研究をふまえて、クリスチャンの立場で本書を著したと確信する。このような考え方のもとに本書を読むならば、思想的な面で極めて理解し易くなる。

ところで本書を通読して痛感したことは、どの章も内容が大盛りのために読むのに骨が折れたということである。これは先の『老いと看取りの社会史』の書評（日本医史学雑誌、三八巻四号）をされた中村昭氏も述べておられる。それは、著者は多くの資料に精力的に目を通してまとめられた成果を、できる限り読者に伝えたいという考えで執筆されたと思うが、もう少し執筆内容をしぼって深く探究された方が理解し易い読みものとなったのではないかと思う。

さいごに第三部現代医療の歴史と課題の第一章死を取り込んだ医療への不安に述べられている論考は、脳死・臓器移植について一般の日本人の本心をいみじくも述べていると思われる。これは本書を是非一読されることをお奨めする理由でもある。

（杉田 暉道）